

本講義の趣旨

—近代仏教学から真宗を問う—

近代仏教学は、文献学・言語学・歴史学・考古学・文化人類学などの客観的学問を基礎にして、「仏教とは何か」を明らかにする学問である。そこには「私にとって」という主体的な問いは欠けている。むしろ、そういうものは極力排除して、純粹に客観的な学問として近代仏教学は発展し、成果をあげてきた。

しかし、それだけで終わるならば、しょせん「学問と信仰は別」になってしまい、本当に仏教を明らかにしたことはない。なぜならば仏教は宗教であり、私たちの生き方を問うものにほかならないからだ。「私にとって仏教とは何か」「仏教から問われる私とは何か」を明らかにしなければならぬゆえである。

だからといって、近代仏教学の成果を無視してよい、ということではない。従来ともすれば、真宗学と仏教学がまったく別々にとりあつかわれ、真宗を仏教学的に解明するという方向がみられなかったことは、真宗の教学者が近代仏教学に関心を払ってこなかったことに原因がある。親鸞の仏教と釈尊の仏教がまるで別々であり、あたかも別の宗教であるかの如きであった。しかし親鸞は釈尊の仏教を学び、これこそが正しい仏教だとの確信のもとに「浄土真宗は大乗のなかの至極なり」（聖典601頁）と宣言したのである。

なぜ、浄土真宗は大乗のなかの至極といえるのか？「親鸞聖人がそうおっしゃったから」では答えにならない。それは、仏教とは何か、大乗仏教とは何か、そして真宗とは何かを思想的に（主体的に）明らかにする作業である。

現代的な教相判釈

数多くの経典があり、説かれている内容が全く異なったり、ときに相互に矛盾しているのはなぜか？この疑問から生まれたのが教相判釈。中近世までは、すべての経典は釈尊金口の説法であると信じられてきたから、「どの経典が釈尊の真意を最もよくあらわしているか」「なぜ別の趣旨を説く経典が存在するのか」を解明することは、かつての仏教者の最大の課題であり、宗派が分立する原因となった。

- 天台大師智顛（天台宗）の〈五時八教〉。
- 嘉祥大師吉蔵（三論宗）の〈二蔵三論〉
- 慈恩大師窺基（法相宗）の〈三教八宗〉
- 賢首大師法蔵（華嚴宗）の〈五教十宗〉
- 弘法大師空海（真言宗）の〈顯密二教〉〈十住心〉
- 日蓮の〈五綱三秘〉
- 親鸞の〈二双四重〉〈真假偽〉

これらの教相判釈の前提は「すべての経典は釈尊の直説である」ということだから（中世近世の限られた文献的知識ではやむをえないが）、その前提が崩れれば、教相判

釈という発想そのものが無意味になる。要するに、法華経であろうが無量寿経であろうが、すべての大乘経典は創作なのである。もっとも、パーリ経典さえ、かなりの部分が後世の付加であり、釈尊が実際に説いた内容を正確に再現することは不可能である。ではあるが、やはり釈尊の真意に近いのは大乘経典ではなく、パーリ経典の方である。

ここで登場したのが「大乘非仏説」である。

そこで考えねばならないのは、文献的な教相判釈ではなく、思想的な教相判釈である。

正統(orthodox)と異端(heterodox)

真宗も禅宗も密教も天台宗も法華宗もひとしく仏教であり、それらのうち何が正しいかを論じるのは無用な対立を生むだけだ、という立場もある。この立場においては正邪とか正統・異端を決するという発想はでてこない。しかし、自分が仏教だと名のつていればそれで仏教だと認めていいのか。それは思想的な営みを完全に放棄することだろう。

仏教が中国・日本に伝えられ、その地域で土着宗教の影響を受け、あるいは融合しながら定着し受容されていったことを、「発展」と捉えるのは危険である。それは仏教が非仏教化していったことと紙一重の差でしかない。インドで仏教が滅亡した最大の原因は、イスラム勢力の侵攻ではなく、土着化しヒンズー化していった仏教＝密教がもはや外見上も教義上もヒンズー教と見分けがつかないほどになり、ヒンズー教に飲み込まれていった、というべきだろう。中国では仏教は道教化し、日本では神道化していった結果、祖霊崇拝・自然崇拝・儀礼至上主義・ト占祭祀などありとあらゆる非仏教的要素が仏教に混じり込み、それらを排除することは困難をきわめる。

只管打坐を命とする日本曹洞宗においてさえ、道元直系は少数派であり、除災招福や先祖崇拝が日常になってしまった。もはや日本では非仏教的要素を排除し純粋な仏教を組織的に求めているのは真宗教団だけ、といってもいい。しかし真宗の教学者でさえ、仏教の日本的発展なるものを手放しで礼讃するむきもあり、要注意だ。

では、正統と異端とを区別する基準は何か。仏教の根本教義は「縁起」であり「無我」である。ここから出発すると、偽物・異端の仏教を次のようにまとめることができる。

- 1 霊魂を説く仏教は異端である。
- 2 実体的な輪廻転生を説く仏教は異端である。
- 3 神への依存を説く仏教は異端である。
- 4 梵我一如を説く仏教（密教）は異端である。
- 5 あの世を説く仏教は異端である。
- 6 汎神論を説く仏教は異端である。
- 7 本覚思想・如来蔵思想を説く仏教は異端である。

(本講義においては、上述のうち、1と7を中心に検討する)

仏教史をみる視点

○発展的教理史観のまやかし

後の時代になるほど仏教は発展していった、のではない。非仏教化の流れと宗教改革とのせめぎ合い。

宗教改革とは、先行する教理を全否定して、釈尊に立ち返ること

○宗教改革の三つのエポック

1. (インド) アビダルマ仏教に対する大乘仏教運動
2. (チベット) アティーンシャとツォンカパによる改革
3. (日本) 鎌倉仏教
- (4). engaged buddhism

○親鸞の末法史観、道元の末法思想批判

呪術批判・神秘主義批判

○「果たして密教は仏教といえるか」(末本文美士)

○金剛頂経に説かれる自我と絶対者との合一(unio mystica)

○仏教がヒンドゥー化して呪術を受容したのが密教

○通俗的な神秘主義の例

「望むものを手に入れるには他力の作用が必要です。他力を作用させるにはどのようにしたらよいのでしょうか？ 神社、仏閣にお参りして願ひ事をする、これもひとつの重要な方法です。でも、本来は修行し霊力を高め、神仏とダイレクトに交信できる霊能者による「祈祷」という方法の方が、より効果的なのです。」(某寺院の広告)

○諸師による神秘主義批判

「徒に所遍しょへんを怖れて山神鬼神等に帰依し、或いは外道の制多じふたに帰依すること勿れ」(道元)

「かなしきかなや道俗の 良時吉日えらばしめ 天神地祇をあがめつつ ト占祭祀つとめとす」(親鸞)

「正しい仏教は土着思想と対決する」「現実否定こそ宗教の生命である」(秋月龍珉)

包括と選択

包括主義：あらゆる教えは究極において一致する、教相判釈においてランク化する

選択主義：正邪を決する、一行に徹する

○日本天台宗は包括主義の典型(なんでもあり)

○比叡山を批判して開宗されたのが鎌倉仏教(単に墮落への失望ではなく、包括主義への批判)

○「頂上(覚り)に至る道はいろいろある」というのは評論家。実際に登るのは一つの道だけ

○「寛容」という名のまやかし。「和」の精神の反仏教性。日本の宗教弾圧。